

# そ菜育苗関係用語の解説

上野幌育種場 中原 忠 夫

**くん炭育苗** もみがらくん炭に培養液を加えて苗を育てる方法で養液育苗の1種である。養液育苗ではもみからくん炭の他、礫、川砂、ウレタン片などが培地材料として使われている。

くん炭の作り方はもみがらを小山に積んで火入れし、途中で焼けた部分と焼けていない部分を混合し、全体が黒焼になった状態で水を沢山かけて火を消して作る。くん炭は一度乾くと水の吸収が悪くなるので消火後水を含んだ状態で使用時まで保存しておく。なおくん炭は生焼の場合、発芽及初期生育がわるく、焼きすぎるとアルカリ度が高くなり鉄欠乏をおこし葉が黄変する。くん炭にはカリとリンが多く含まれアルカリ性を示すので良く水洗して使う。また鉄源としてキレート鉄を使う。

播種はポリエチレンをしきくん炭を入れた箱内で行ない、子葉展開時か本葉1枚時にくん炭を入れた鉢に移植する。そしてポリシートを張って2cmの深さに培養液をためたベットに鉢をならべ、培養液がなくなれば苗の様子を見ながら水か、培養液を加える。

この育苗法によると床土が不要なので手間もかからず、無菌培地で育苗するため病害虫の発生も少ない。苗が軽いため運搬が楽で定植し易く、苗の発育が早く育苗期間を短縮できるなどの利点がある。しかしもみがらくん炭育苗法といっても化学的育苗法なので、その方法をまちがえるとと思わぬ失敗を招くので十分注意する。

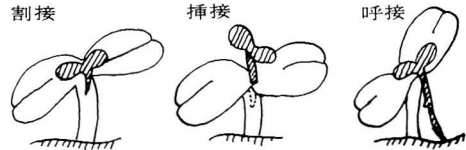
**接木育苗** スイカの蔓割病防除対策としてとりあげられた接木育苗は低温伸長性を増し、吸肥力が強まるなどの利点が見とめられ、ハウス促成栽培だけでなくトンネル栽培にとっても重要な育苗技術となっている。

現在ではスイカだけでなく、キウリ、メロン、ナス、トマトにもおこなわれるようになり、省力化にはつながらないが、耐病性の問題、とくに連作に近い作付となっているため、現在の耐病性では解決されない面の多いことから接木労力以上の効果がみとめられている。

接木台木については耐病性、作型の適応性などの点についてもっとも能力の高い種類、品種の選択、穂と台木との親和性などの点でまだまだ解決しなければならない問題が多い。現在とりあげられている台木としては次のようなものがある。

- スイカ： ユウガオ（インド，スイス，さきがけ）  
カボチャ（新土佐，デリシャス）
- キウリ： カボチャ（新土佐，デリシャス）  
黒種カボチャ（フィシフォリア）
- メロン： カボチャ（新土佐，デリシャス）
- ナス： 赤ナス
- トマト： 野生トマト

接木方法は割接（スイカ、ナス、トマト）挿接（スイカ）が一般的に行なわれている。割接、挿接では活着不良だったキウリ、メロンは呼接法が導入されて急速に普及した。接木作業は要領を会得し、なれるとむづかしい作業ではないが、活着を左右する条件としてはウリ類の割接、挿接では接木後の温度管理（30℃、湿度100%）によることが多く、さらに台と穂の状態が問題になる。台と穂は若いほど活着しやすいが、軸の太さ、長さなどが接木作業の難易に関係し、接木後温度管理の簡単な呼接では接木作業中の傷みなどが活着を悪くすることが多い。台と穂の播種期についてとくにキウリ、メロンでは品種、育苗法などによって検討しなければならない。



**ミスト繁殖** 露地の挿木で発根の困難なものとか、大きな穂のまま挿木して鉢物に使う場合など草花、花木、果樹などの新しい挿木法としてミスト繁殖が目目されている。最近ではスイカで挿木繁殖で接木同様の効果があるということもあってここでとりあげてみた。

ミスト繁殖はガラス室、ハウスに加圧式のミスト装置を設け、1時間に5～6回 1回に4～7秒間位(天候、時期によって加減)タイマーか電気葉で自動的に噴霧して、黒寒冷紗で覆った室内の湿度を夜間100%日中70～90%に保ち、挿木の発根を促進する。挿木床の土は常に湿った状態にあるので、水分の保持より、排水の良いことと、発根した弱い根の根当りの良い土ということでピートモスと川砂を等量混合したものなどが用いられている。

ミスト繁殖の行なわれているものはカーネーションポットマムなどが多く、カーネーションは挿し芽してから20日、ポットマムは14日位で移殖できる。花木類ではツツジを主体に切花用花木の繁殖に用いられている。挿木の困難なものがとりあげられるばかりでなく省力と発根期間の短縮という点でも利用性がみとめられる。ミスト繁殖は年中何の種類でも可能というわけではなく、夫々に適期があり、発根した苗の育苗施設と組合さって合理的な利用が好ましい。季節や天候によって室内の温度、噴霧量などに手加減することも大切である。